

表 3 30 歳時のキャリア/ライフデザインと学校ランク

		学校ランク (%)			合計 (N)
		普通科上位校	普通科下位校・ 総合学科	専門学科	
男子	正社員	38.7	34.7	26.6	100.0 (2372)
	自営	37.6	36.6	25.8	100.0 (861)
	アルバイト・パート他	44.6	31.5	23.9	100.0 (92)
	未定	39.1	39.5	21.5	100.0 (233)
	合計	38.6	35.4	26.0	100.0 (3558)
女子	正社員	45.7	39.2	15.1	100.0 (2085)
	自営	49.3	36.4	14.3	100.0 (637)
	専業主婦	38.5	45.1	16.4	100.0 (532)
	アルバイト・パート他	36.3	40.6	23.0	100.0 (256)
	未定	36.8	52.1	11.1	100.0 (280)
	合計	44.0	40.6	15.4	100.0 (3790)

男子： $\chi^2=5.673$ df=6 n.s. ; 女子： $\chi^2=45.474$ df=8 $p<0.001$

注) 学校ランクは、調査対象校の学科や現役 4 年制大学進学率に基づいて、学科ごとに設定した。

「普通科上位校」：普通科（理数科含む）で、現役 4 年制大学進学率が 40%以上

「普通科下位校・総合学科」：普通科で、現役 4 年制大学進学率が 40%未満の学科と総合学科

「専門学科」：理数科を除く専門学科

3.1.2 高校生の 30 歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと成績自己評価

次に、キャリア/ライフデザインと学校内における成績の自己評価の関係をみると（表 4）、男子では、「下の方」の占める割合は、〔正社員〕＜〔自営〕＜〔アルバイト・パート他〕＜〔未定〕となっており、〔正社員〕と〔未定〕では、およそ、2 倍の開きがある。「上のほう」と「上の中」をまとめ、「中の下」と「下の方」をまとめて「比較してみると、キャリア/ライフデザインによる違いが明らかになり、男女ともに、〔正社員〕と〔自営〕では、「上」が多い傾向が見られる。また、表には示さないが、成績別に見ても「下の方」は、〔正社員〕比率が低く、〔未定〕比率が高い傾向が見られる。学内での成績の自己評価は、少なからず、自分の将来像を描くことが出来るかどうかと関係していると考えられる。

表 4 30 歳時のキャリア/ライフデザイン働き方と成績自己評価

		成績自己評価 (%)					合計 (N)
		上のほう	上の中	真ん中	中の下	下のほう	
男子	正社員	13.1	21.3	32.2	17.9	15.6	100.0 (2360)
	自営	11.7	19.8	28.7	18.1	21.8	100.0 (858)
	アルバイト・パート他	15.2	12.0	30.4	15.2	27.2	100.0 (92)
	未定	10.9	15.7	28.3	17.0	28.3	100.0 (230)
	合計	12.7	20.3	31.0	17.8	18.2	100.0 (3540)
女子	正社員	10.6	25.9	34.8	17.4	11.2	100.0 (2068)
	自営	12.8	21.7	31.5	17.1	16.9	100.0 (632)
	専業主婦	9.5	21.8	34.7	17.2	16.9	100.0 (528)
	アルバイト・パート他	9.1	19.8	34.1	19.0	17.9	100.0 (252)
	未定	6.8	25.2	34.2	17.6	16.2	100.0 (278)
	合計	10.5	24.2	34.1	17.5	13.8	100.0 (3758)

男子： $\chi^2=44.189$ df=12 $p<0.001$ ； 女子： $\chi^2=39.683$ df=12 $p<0.001$

3.1.3 高校生の 30 歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと予定進路

調査時点で予定している進路との関係を見たものが表 5 である。

表 5 30 歳時のキャリア/ライフデザインと予定進路

		卒業後(未定も含む) の進路 (%)						合計 (N)
		正社員	専門・ 各種学校	短大	4大	フリーター	その他	
男子	正社員	28.8	14.0	3.5	50.4	0.8	2.5	100.0 (2371)
	自営	21.3	24.1	3.4	44.2	2.3	4.7	100.0 (859)
	アルバイト・パート他	23.9	15.2	2.2	47.8	3.3	7.6	100.0 (92)
	未定	21.5	16.7	1.3	48.9	4.3	7.3	100.0 (233)
	合計	26.4	16.7	3.3	48.8	1.5	3.5	100.0 (3555)
女子	正社員	19.2	22.5	15.0	39.1	1.1	3.1	100.0 (2082)
	自営	12.6	31.8	10.5	37.6	2.2	5.3	100.0 (636)
	専業主婦	28.2	20.5	14.8	28.9	4.3	3.2	100.0 (532)
	アルバイト・パート他	25.5	25.9	13.3	23.1	9.0	3.1	100.0 (255)
	未定	22.9	18.3	14.3	36.9	2.5	5.0	100.0 (279)
	合計	20.0	23.7	14.1	36.2	2.4	3.6	100.0 (3784)

男子： $\chi^2=112.409$ df=15 $p<0.001$ ； 女子： $\chi^2=177.009$ df=20 $p<0.001$

男女ともに、〔自営〕で「専門・各種学校」への進学を予定している者が多い。専門的な技術を身につけ、企業組織に頼らない（しばられない）働き方をしたいと考えているのではないだろうか。男子では、〔アルバイト・パート他〕と〔未定〕で「フリーター」や「その他」の比率が高い。高校卒業後の進路でさえ、はっきりしない状況で、10年後のことを思い描くなど難しいのかもしれない。また、女子で興味深いのが、〔正社員〕と〔自営〕よりも〔専業主婦〕、〔ア

アルバイト・パート他]、[未定]で、卒業後就職する予定の者（「正社員」）の比率が高い。長期的な視点から、就職を選んだというよりも、高校を卒業し、とりあえず就職するものの、働き続けようと思う者は少ないといえる。

3.2 高校生の30歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと進路に関する意識

ここでは、キャリア/ライフデザインと進路に関する意識の関係についてみていく。進路に関する意識は、表6に示した8項目で、それぞれの項目は、「とてもあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4点尺度で測定されている。「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」を、「あてはまる」としてまとめて、「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」としてまとめて、2カテゴリーに分類した。表6に示した数値は、「あてはまる」人の割合（%）である。「若いうちはやりたくない仕事にはつきたくない」以外の項目で有意な差が見られた。以下、項目ごとに違いを見ていこう。

「どんな仕事をしたいのかよくわからない」は、男女ともに〔自営〕がもっとも少なく（順に35.9%、26.9%）、〔未定〕がもっとも多い（順に62.3%、45.7%）。

「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」は、男女ともに〔未定〕がもっとも多い（順に54.4%、43.5%）。男子では、〔アルバイト・パート他〕が30.3%ともっとも少なく、〔未定〕と20ポイント以上の開きがある。また、女子では、〔正社員〕が34.2%ともっとも少ない。

「自分の進路について今でも悩んでいる」は、男女ともに、他のカテゴリーに比べ、〔未定〕が多い。悩んでいるがゆえ、30歳時のキャリア/ライフデザインも描けないということなのかもしれない。

「自分には10年後の目標がある」は、ほぼ30歳時点と近い時点の目標をたずねているが、必ずしも仕事に限定していないため、〔未定〕以外の回答者のほとんどが「あてはまる」と回答したわけではない。しかし、男女とも〔未定〕の者で、あると回答している者はもっとも少ない。一方、男子の〔自営〕と〔アルバイト・パート他〕の6割前後、女子の〔自営〕の7割があると回答しているのが際立っている。〔正社員〕では、目標がある人は、むしろ少ない傾向が見られ、〔自営〕ほどの強い意思ではなく、消極的な理由で（「まあそんなものかな…」というように）、〔正社員〕というキャリア/ライフデザインを描いている可能性がある。

「進路について今、真剣に考えないと将来困ると思う」は、男女ともに〔正社員〕、〔自営〕が多く、その他のカテゴリーは少ない。将来のことも考慮して進路について考えていることが、〔正社員〕や〔自営〕という選択をさせたのだろう。

「社会でうまくやっていけるか不安だ」は、男子では〔正社員〕が多いが、将来のことを真剣に考えているがゆえ、不安も生じてくるということだろうか。一方、女子では〔正社員〕、〔専業主婦〕、〔未定〕が多く、不安がゆえ、〔専業主婦〕や〔未定〕ということになってしまった可能性がある。

「将来よりも今の生活を楽しみたいと思う」は、男子では〔未定〕、女子では〔専業主婦〕、〔未定〕が多く、現在志向であることが、将来のことを決められない状況を作り出しているのだろうか。

表 6 30 歳時のキャリア/ライフデザインと進路に関する意識（「あてはまる」人の割合（％））

	どんな仕事をしたいのか よくわからない	自分のやりたい仕事を しぼるのはまだ早いと思う	自分の進路について 今でも悩んでいる	自分には 10 年後の 目標がある	進路について今、真剣に 考えないと将来困ると思う	社会でうまくやって いけるか不安だ	将来よりも今の生活を 楽しみたいと思う	若いうちはやりたくない 仕事にはつきたくない
男子 正社員	43.7	41.6	42.5	38.0	83.3	77.8	62.2	53.6
自営	35.9	41.2	40.4	59.3	80.4	66.7	62.2	56.6
アルバイト・パート他	36.0	30.3	48.3	61.8	67.4	59.6	46.6	57.3
未定	62.3	54.4	58.3	27.4	71.1	69.9	71.8	55.3
合計	42.8	42.1	43.2	43.0	81.4	74.1	62.5	54.5
(N)	(1505)	(1476)	(1515)	(1511)	(2861)	(2602)	(2192)	(1914)
χ^2	54.174	19.690	25.458	151.525	33.917	52.497	17.983	2.605
df	3	3	3	3	3	3	3	3
p	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.457
女子 正社員	30.3	34.2	37.2	49.3	88.5	80.8	54.8	55.8
自営	26.9	39.3	43.7	68.1	83.1	76.0	51.0	59.1
専業主婦	44.0	42.1	45.5	40.2	76.9	80.2	67.1	60.6
アルバイト・パート他	37.6	39.8	42.9	48.2	78.7	76.8	61.5	57.3
未定	45.7	43.5	52.0	35.9	72.5	81.2	65.0	53.8
合計	33.2	37.3	40.9	50.1	84.1	79.6	57.1	57.0
(N)	(1254)	(1404)	(1542)	(1887)	(3171)	(3004)	(2144)	(2149)
χ^2	68.734	19.727	32.681	126.373	84.949	8.597	44.514	6.241
df	4	4	4	4	4	4	4	4
p	0.000	0.001	0.000	0.000	0.000	0.072	0.000	0.182

以上をまとめると、男女ともに〔未定〕の者で、将来の進路を決めかね、悩んでいる様子がうかがえる。しかし、悩みながらも、ある種あきらめのようなものもあるのか、やりたい仕事を決定することを忌避する傾向も見られる。

興味深いのは、男子の〔アルバイト・パート他〕である。どんな仕事をしたいのかわからない人は少なく、10 年後の目標をもっている人ももっとも多い。また、社会に出て行く不安はもっとも少ない。一見矛盾するような結果である。しかし、ここでは、詳細な分析はしないが、75 人中「アルバイト・パート」は 9 人しかいなく、「その他」の生徒の意識を反映したものである可能性が高い。

3.3 高校生の 30 歳時のキャリアデザイン・ライフデザインとフリーターに関する意識

ここでは、30 歳時のキャリア/ライフデザインとフリーターに関する意識の関係についてみていく。将来のキャリア/ライフデザインが、はっきりとしていれば、フリーターに対して、厳しい見方をしている可能性は高いのではないだろうか。フリーターに関する意識は、表 7 に示した 9 項目で、それぞれの項目は、「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、

「まったくそう思わない」の4点尺度で測定されている。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を、「そう思う」としてまとめ、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を「そう思わない」としてまとめて、2カテゴリーに分類した。表7に示した数値は、「そう思う」人の割合(%)である。

表7 30歳時のキャリア/ライフデザインとフリーターに関する意識(「そう思う」人の割合(%))

	働き口減少でしかたない	やりたいこと探しのためならよい	本人が無気力	高校の進路指導が不十分	たいした問題ではない	夢を実現のためかっこいい	だれでもなるかもしれない	あとあとまで不利だ	りっぱな働き方
男子 正社員	67.1	63.7	71.2	25.0	26.3	32.0	68.9	76.2	41.8
自営	62.2	67.1	69.1	29.3	30.4	42.0	72.4	71.1	46.1
アルバイト・パート他	60.5	68.6	62.8	33.7	29.1	47.7	65.1	63.5	55.2
未定	66.1	68.1	64.8	22.2	32.3	37.3	70.0	61.5	51.8
合計	65.6	64.9	70.1	26.1	27.7	35.2	69.8	73.7	43.8
(N)	(2303)	(2275)	(2453)	(910)	(970)	(1231)	(2440)	(2580)	(1531)
χ^2	7.715	4.972	7.040	10.558	7.985	34.141	4.360	32.626	16.120
df	3	3	3	3	3	3	3	3	3
p	0.052	0.174	0.071	0.014	0.046	0.000	0.225	0.000	0.001
女子 正社員	73.4	61.6	64.0	18.0	26.2	40.7	72.5	71.4	47.5
自営	70.2	70.2	59.9	20.3	27.3	51.0	75.1	61.2	54.5
専業主婦	73.8	68.7	59.4	18.6	34.5	42.3	76.8	68.3	50.6
アルバイト・パート他	75.7	74.2	55.3	17.6	36.1	48.4	70.7	65.7	58.9
未定	75.9	68.1	54.9	19.8	30.1	47.6	76.8	60.3	57.7
合計	73.2	65.4	61.4	18.6	28.5	43.6	73.7	68.1	50.6
(N)	(2757)	(2459)	(2307)	(696)	(1070)	(1639)	(2772)	(2553)	(1897)
χ^2	4.929	31.491	16.211	2.064	22.672	25.665	7.163	32.628	24.526
df	4	4	4	4	4	4	4	4	4
p	0.295	0.000	0.003	0.724	0.000	0.000	0.128	0.000	0.000

全体的には、雇用状況の悪さを認識し、誰でもフリーターになる可能性があるという不安感を抱いているが、フリーターになる原因は本人にあるとも考えている。以下、キャリア/ライフデザイン別に見ていこう。

「働き口が減っているのでしかたない」は、男子のみ有意な差が見られ、〔正社員〕と〔未定〕で多い(順に、67.1%、66.1%)。しかし、全体的にみると、どのキャリア/ライフデザインをもつ者でも、6割以上がそう思うと回答し、雇用環境の厳しさを認識している様子がうかがえる。

「自分がやりたいことを探すためにはよいことだ」は、女子のみ有意な差が見られ、〔自営〕

と〔アルバイト・パート他〕で多い（順に、74.2%、70.2%）。

「本人が無気力なせいだ」は、男女ともに有意な差が見られ、〔正社員〕がもっとも多く、〔未定〕がもっとも少ない。しかし、どのカテゴリーも男子の方が「そう思う」人の割合が多く、厳しい見方をしている。

「高校の進路指導が不十分なせいだ」は、男子のみ有意な差が見られ、〔アルバイト・パート他〕で多い（33.7%）。フリーターになる原因を他に起因させるというやや甘い考え方をもっている人が多いといえるだろう。

「そのうちにきちんとした仕事につく人が多いのでたいした問題ではない」は、男女ともに有意な差が見られるが、男子では〔正社員〕、女子では〔正社員〕と〔自営〕で少ない（順に、26.3%、26.2%、27.3%）。

「夢を実現するためにフリーターをしている人はかっこいい」は、男女ともに有意な差が見られ、〔正社員〕でもっとも少ない（順に、32.0%、40.7%）。男子では、〔アルバイト・パート他〕で突出して多く（47.7%）、女子では、〔自営〕、〔アルバイト・パート他〕、〔未定〕が、順に 51.0%、48.4%、47.6%と続いている。

「だれでもフリーターになるかもしれない」は、男女ともに有意な差は見られず、7割程度がそう思っている。調査時点では、まだまだ、雇用環境は厳しく、そのような状況では、自分もそうなりえると考える回答者が多かったのだろう。

「フリーターになると、あとあとまで不利だ」は、男女ともに有意な差が見られ、男子では、〔正社員〕（76.2%）と〔自営〕（71.1%）、女子では、〔正社員〕（71.4%）と〔専業主婦〕（68.3%）で多い。女子の〔自営〕では、そう思う人が 61.2%と少なく、男子の〔自営〕とは 10 ポイント以上の開きがあり、同じ〔自営〕を希望していても、意識に違いが見られる。

「フリーターもりっぱな 1 つの働き方だ」は、男女ともに有意な差が見られ、〔アルバイト・パート他〕と〔未定〕で多い傾向が見られる（男女の順に、55.2%、51.5%、58.9%、57.7%）。そのような肯定的な意識をもつがゆえ、将来に関しても、〔アルバイト・パート他〕や〔未定〕という選択をすることは、必然的な結果といえるのかもしれない。

以上をまとめ、キャリア/ライフデザイン別に見ると、男女ともに、〔正社員〕は、フリーターに対し、やや厳しい考え方をもっており、〔アルバイト・パート他〕や〔未定〕は、やや甘い考え方をもっている。また、女子の〔自営〕は、やりたいことを探したり、夢の実現のためなら、フリーターという生き方もよいと考えたり、その働き方を肯定している傾向が見られ、男子の〔自営〕とは、若干異なる。男女では、〔自営〕という働き方の持つ意味が異なるのかもしれない。このように、どのようなキャリア/ライフデザインをもっているのかにより、フリーターに関する意識には違いが見られる。若年層のフリーターや無業者の問題は、少なからず、意識の影響を受けていることが示唆される。

3.4 高校生の 30 歳時のキャリアデザイン・ライフデザインと親との同居に関する意識

次に、キャリア/ライフデザインと親との同居に関する意識にどのような関連があるのかについてみていこう。親との同居に関する意識は、表 8 に示した 6 項目で、それぞれの項目は、フリーターに関する意識と同様、「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の 4 点尺度で測定されている。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を、「そう思う」としてまとめ、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を「そう

思わない」としてまとめて、2カテゴリーに分類した。表8に示した数値は、「そう思う」人の割合(%)である。

表8 30歳時のキャリア/ライフデザインと親との同居に対する意識(「そう思う」人の割合(%))

		家事を親に してもらえ るので楽	早く自立 したほう がよい	親もよろ こぶので よい	収入がな いならし かたない	好きなこ とに使い えるお金 が増えて 得	なかな か結婚し にくくな る
男子	正社員	61.0	90.6	32.5	69.1	50.0	45.1
	自営	56.8	91.0	31.2	64.6	51.2	43.9
	アルバイト・パート他	56.3	85.1	27.6	62.5	55.2	44.8
	未定	58.6	88.9	26.7	63.3	53.3	46.3
	合計	59.7	90.5	31.7	67.5	50.6	44.9
	(N)	(2091)	(3167)	(1109)	(2360)	(1770)	(1572)
	χ^2	5.144	3.969	4.177	8.839	1.876	0.583
	df	3	3	3	3	3	3
	p	0.162	0.265	0.243	0.032	0.599	0.900
女子	正社員	62.5	88.0	37.7	72.7	50.9	31.7
	自営	59.3	88.8	34.3	69.5	49.9	35.0
	専業主婦	65.8	85.2	39.5	76.5	55.7	33.5
	アルバイト・パート他	54.3	85.5	32.5	72.5	53.9	28.5
	未定	68.8	81.3	33.0	76.1	58.2	22.0
	合計	62.3	87.1	36.7	72.9	52.2	31.6
	(N)	(2346)	(3277)	(1378)	(2739)	(1963)	(1188)
	χ^2	17.026	13.313	7.641	8.517	9.515	17.000
	df	4	4	4	4	4	4
	p	0.002	0.010	0.106	0.074	0.049	0.002

興味深いのは、男子では、どの項目もキャリア/ライフデザインによる意識の違いが見られないのに対し、女子では、「子どもとの同居を親もよろこぶのでよいことだ」以外の項目で有意な差が見られ、男女では、親との同居に対する意識に違いがあることだ²⁾。また、全般的に見て、男子よりも女子の方が、同居に対して肯定的な考えをもっており、現代における男女の親子関

係の違いを反映している様子がうかがえる。ここでは、女子について有意な差の見られた5項目のみ見ていく。

「家事を親にしてもらえるので楽だ」は、〔未定〕(68.8%)、〔専業主婦〕(65.8%)、〔正社員〕(62.5%)の順で多い。

「親元を離れて早く自立した方がよい」は、〔正社員〕(88.0%)、〔自営〕(88.8%)が多いが、そのほかのグループも、8割以上がそう思うと回答している。

「1人で暮らすだけの収入がないなら仕方がない」は、〔未定〕(76.1%)と〔専業主婦〕(76.5%)が多いが、そのほかのグループも、7割以上がそう思うと回答している。

「生活費がうくので、好きなことに使えるお金が増えて得だ」は、〔未定〕(58.2%)が多く、〔自営〕(49.9%)と〔正社員〕(50.9%)が少ない。

「親と同居していると、なかなか結婚しにくくなる」は、もっとも多い〔自営〕が35.0%、もっとも少ない〔未定〕が22.0%と10ポイント以上の開きがある。

以上をまとめてみると、女子の場合、親元を離れて早く自立した方がよいと思いつつ、収入的に無理なら仕方なく、家事をしてもらえるので楽だとも考えている。親との同居に対するホンネとタテマエが混在しており、高校生3年生という将来を考え始める微妙な年齢が、影響しているのかもしれない。キャリア/ライフデザイン別に見ると、〔正社員〕、〔自営〕は、同居に否定的な考えをもつ者が多い傾向が見られ、逆に〔未定〕では、同居に肯定的な考えをもつ者が多い。親との同居を自立の指標のひとつと考えると、将来の自分という者が明確に描けない者は、親への依存度も高いということなのかもしれない。

3.5 高校生の30歳時のキャリアデザイン・ライフデザインの規定要因

前節までの分析では、30歳時点のキャリア/ライフデザインと属性、進路・フリーター・親との同居に関する意識との関連を見てきた。それぞれの変数は、キャリア/ライフデザインにより、さまざまな違いが見られた。他の変数の影響を取り除いた上で、それぞれの変数がどのような影響を及ぼしているのかを確認するために、男女別に多項ロジットモデルにより推定した(男子 表9、女子 表10)。従属変数は、30歳時点のキャリア/ライフデザインで、〔未定〕を基準変数とした。また、独立変数は、成績自己評価、学校ランク(「専門学科」を基準カテゴリー)、予定進路(「その他」を基準カテゴリー)、進路に関する意識(8変数:「あてはまる」=1)、フリーターに関する意識(9変数:「あてはまる」=1)、同居に関する意識(6変数:「あてはまる」=1)である。

男子の場合、有意な効果をもっているのは、成績自己評価、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識である。しかし、進路に関する意識以外では、〔正社員〕のみ有意な効果が見られ、成績自己評価が高いほど、予定進路が「正社員」「短大」「4年制大学」、そして、「フリーターになるとあとあとまで不利だ」と思っているほど、〔正社員〕を希望している。また、進路に関する意識について見ると、「どんな仕事をしたいのかよくわからない」、「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」、「自分の進路について今でも悩んでいる」、「将来よりも今の生活を楽しみたいと思う」で、すべてのカテゴリーではないものの、総じて負の効果がみられる。「自分には10年後の目標がある」では〔自営〕と〔パート・アルバイト他〕で、「進路について今、真剣に考えないと将来困ると思う」では〔正社員〕と〔自営〕、「社会でうまくやっていけるか不安だ」では〔正社員〕のみ有意な正の効果がみられる。以上のことは、進路に

悩み目標をもてないこと、進路決定を忌避していること、現在志向であることなどが、〔未定〕になりやすいことを意味している。以上のように、学校における成績、その結果といえる予定進路、そして、進路に関する意識が、将来像を描くことに、影響を与えていることが確認できた。

表 9 30 歳時のキャリア/ライフデザインの規定要因（男子）

独立変数	キャリア/ライフデザイン（基準カテゴリー＝未定）					
	正社員		自営		パート・パートその他	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)	B	Exp (B)
成績自己評価	0.154	1.166 *	0.089	1.093	0.069	1.071
学校ランク						
進学校	-0.092	0.912	-0.212	0.809	-0.089	0.915
進路多様校 (専門学科)	-0.152	0.859	-0.195	0.823	-0.265	0.768
予定進路						
正社員	1.004	2.730 **	0.132	1.142	-0.335	0.715
専門・各種学校	0.389	1.476	0.293	1.341	-0.616	0.540
短大	1.620	5.055 *	0.962	2.616	-0.419	0.657
4年制大学	0.845	2.329 *	0.142	1.153	-0.311	0.733
フリーター (その他)	-0.494	0.610	-0.265	0.767	-1.982	1.138
進路に関する意識						
どんな仕事をしたいのかわからない	-0.510	0.600 **	-0.593	0.553 **	-0.615	0.541 +
自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う	-0.171	0.843	-0.054	0.947	-0.750	0.472 *
自分の進路について今でも悩んでいる	-0.448	0.639 **	-0.412	0.663 *	0.114	1.121
自分には10年後の目標がある	0.218	1.244	1.027	2.793 ***	1.164	3.201 ***
進路について今、真剣に考えないと将来困ると思う	0.529	1.697 **	0.328	1.389 +	-0.247	0.781
社会でうまくやっていけるか不安だ	0.396	1.487 *	-0.032	0.969	-0.366	0.693
将来よりも今の生活を楽しみたいと思う	-0.330	0.719 +	-0.303	0.739 +	-0.966	0.381 **
若いうちはやりたくない仕事にはつきたくない	0.018	1.019	0.131	1.140	0.250	1.283
フリーターに関する意識						
働き口が減っているのだから可哀想	0.050	1.052	-0.148	0.862	-0.157	0.855
自分がやりたいことを探すためにはよいことだ	-0.032	0.968	0.059	1.061	0.107	1.113
本人が無気力なせいだ	0.140	1.151	0.116	1.123	-0.055	0.947
高校の進路指導が不十分なせいだ	0.061	1.063	0.242	1.274	0.472	1.603
そのうちにきちんとした仕事につく人が多いのでた いした問題ではない	0.026	1.026	0.038	1.039	-0.309	0.734
夢を実現するためにフリーターをしている人はかっ こいい	-0.025	0.975	0.280	1.323	0.406	1.500
だれでもフリーターになるかもしれない	-0.055	0.947	0.166	1.180	-0.336	0.715
フリーターになると、あとあとまで不利だ	0.460	1.584 **	0.255	1.291	0.213	1.237
フリーターもりっぱな1つの働き方だ	-0.138	0.871	-0.072	0.931	0.446	1.562
同居に関する意識						
家事を親にしてもらえるので楽だ	0.204	1.226	0.109	1.115	0.043	1.044
親元を離れて早く自立したほうがよい	0.162	1.176	0.120	1.128	-0.108	0.897
子どもとの同居を親もよるこぶのでよいことだ	0.263	1.301	0.204	1.226	0.071	1.074
1人で暮らすだけの収入がないならしかたない	0.193	1.213	-0.002	0.998	-0.103	0.902
生活費がうくので、好きなことに使えるお金が増え て得だ	-0.207	0.813	-0.127	0.881	0.218	1.243
親と同居していると、なかなか結婚しにくくなる	-0.146	0.864	-0.150	0.860	-0.004	0.996
切片	0.620		0.493		-0.087	

N=3333, df=93, $\chi^2=450.292$, -2 log-likelihood=5385.535, Cox&Shell $R^2=.126$, Nagelkerke $R^2=.153$, McFadden $R^2=.077$,
 ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

表 10 30 歳時のキャリア/ライフデザインの規定要因（女子）

独立変数	キャリア/ライフデザイン（基準カテゴリー＝未定）							
	正社員		自営		専業主婦		アルバイト・パートその他	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)	B	Exp (B)	B	Exp (B)
成績自己評価	0.070	1.073	0.031	1.031	0.031	1.032	0.029	1.029
学校ランク								
進学校	-0.242	0.785	-0.292	0.747	0.005	1.005	-0.301	0.740
進路多様校 （専門学科）	-0.690	0.502 **	-0.822	0.439 **	-0.442	0.643 +	-1.008	0.365 ***
予定進路								
正社員	0.203	1.226	-0.523	0.593	0.700	2.014	0.655	1.924
専門・各種学校	0.372	1.450	0.233	1.263	0.531	1.701	0.761	2.140
短大	0.348	1.416	-0.456	0.634	0.470	1.600	0.488	1.630
4年制大学	0.359	1.432	-0.219	0.803	0.166	1.180	0.001	1.001
フリーター （その他）	-0.011	0.989	-0.116	0.890	1.062	2.893 +	1.844	0.324 **
進路に関する意識								
どんな仕事をしたいかわからない	-0.347	0.707 *	-0.377	0.686 *	0.002	1.002	-0.072	0.930
自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う	-0.034	0.967	0.238	1.269	0.133	1.142	0.264	1.302
自分の進路について今でも悩んでいる	-0.475	0.622 **	-0.070	0.932	-0.317	0.729 +	-0.353	0.702 +
自分には10年後の目標がある	0.139	1.149	0.958	2.605 ***	0.130	1.139	0.293	1.341
進路について今、真剣に考えないと将来困ると思う	0.861	2.366 ***	0.244	1.276	0.249	1.283	0.377	1.457
社会でうまくやっていけるか不安だ	-0.152	0.859	-0.312	0.732	-0.240	0.787	-0.429	0.651 +
将来よりも今の生活を楽しみたいと思う	-0.169	0.845	-0.379	0.684 *	0.151	1.163	-0.110	0.896
若いうちはやりたくない仕事にはつきたくない	0.165	1.179	0.328	1.388 *	0.260	1.297	0.217	1.242
フリーターに関する意識								
働き口が減っているのではかたない	0.133	1.142	-0.041	0.960	-0.058	0.944	0.152	1.164
自分がやりたいことを探すためにはよいことだ	-0.021	0.979	0.275	1.316	0.134	1.144	0.297	1.345
本人が無気力なせいだ	0.145	1.156	0.033	1.034	0.099	1.104	0.007	1.007
高校の進路指導が不十分なせいだ	-0.240	0.786	-0.087	0.917	-0.296	0.744	-0.200	0.819
そのうちにきちんとした仕事につく人が多いのでたいした問題ではない	0.227	1.254	0.018	1.018	0.338	1.403 +	0.233	1.262
夢を実現するためにフリーターをしている人はカッコいい	-0.192	0.825	0.024	1.024	-0.279	0.756	-0.108	0.898
だれでもフリーターになるかもしれない	-0.116	0.890	0.030	1.030	0.020	1.021	-0.198	0.820
フリーターになると、あとあとまで不利だ	0.290	1.337 +	-0.006	0.994	0.202	1.224	0.325	1.385
フリーターもりっぱな1つの働き方だ	-0.177	0.838	-0.087	0.917	-0.265	0.767	-0.001	0.999
同居に関する意識								
家事を親にしてもらえるので楽だ	-0.317	0.728 *	-0.350	0.705 *	-0.210	0.810	-0.663	0.515 **
親元を離れて早く自立したほうがよい	0.378	1.459 *	0.448	1.565 *	0.255	1.290	0.259	1.295
子どもとの同居を親もよろこぶのでよいことだ	0.361	1.435 *	0.226	1.254	0.260	1.296	0.003	1.003
1人で暮らすだけの収入がないならしかたない	-0.049	0.952	-0.172	0.842	0.042	1.043	-0.214	0.807
生活費がうくので、好きなことに使えるお金が増えて得だ	-0.170	0.844	-0.173	0.842	-0.165	0.848	-0.032	0.968
親と同居していると、なかなか結婚しにくくなる	0.454	1.575 **	0.642	1.900 ***	0.627	1.871 **	0.408	1.504
切片	1.318	*	0.737		-0.159		-0.224	

N=3598, df=124, $\chi^2=530.481$, -2 log-likelihood=8626.834, Cox&Shell $R^2=.137$, Nagelkerke $R^2=.149$, McFadden $R^2=.058$, ***p<.001, **p<.01, *p<.05, +p<.10

一方、女子の場合には、「成績自己評価」以外で有意な効果が見られ、その中身も男子とは異なる様相を示している。男子では、効果が見られなかった学校ランクや同居に関する意識も有

意な効果をもっており、この変数を中心に見ていく。「進路多様校」であることが、すべてのカテゴリーに負の効果をもっている。つまり、「進路多様校」であることが、〔未定〕になり易いといえる。また、同居に関する意識では、〔正社員〕は、〔未定〕と比べて、「家事をしてもらえるので楽だ」とは考えていなく、「親元を離れて早く自立した方がよい」、「子どもとの同居を親もよろこぶのでよいことだ」、「親と同居していると結婚しにくくなる」と考えている。〔自営〕は、〔未定〕と比べて、「家事をしてもらえるので楽だ」とは考えていなく、「親元を離れて早く自立した方がよい」、「親と同居していると結婚しにくくなる」と考えている。〔専業主婦〕は、〔未定〕と比べて、「親と同居していると結婚しにくくなる」と考えている。〔パート・アルバイト他〕は、〔未定〕と比べて、「家事をしてもらえるので楽だ」とは考えていない。これらのことから、〔未定〕は、親との同居は、家事をしてもらえるので楽だと考え、親元を離れて自立した方がよいとは考えていなく、結婚しにくくとも考えていない。このような親と同居することを通しての親への甘えが、キャリア/ライフデザインを描けないことに影響を与えていることが示唆される。男子には、見られないことであり、近年の母娘密着状況を反映しているといえるのかもしれない。

4. まとめ

高校生が30歳時点でどのようなキャリア/ライフデザインを描き、どのような要因と関連しているのかを検討してきた。

分析の結果、キャリア/ライフデザインは、男女で異なる様相を示していた。「正社員」を希望する者は、男子で66.7%、女子で55.0%と最も多いものの、「起業」では男子は女子の2倍、「アルバイト・パート」では女子は男子の17倍、「専業主婦・主夫」では女子は男子の35倍と大きな開きがある。さまざまな職業分野へ女性が進出するようになったり、結婚や育児により仕事をやめる人が減ってきているとはいえ、育児により仕事をやめる人はいまだ多い。また、育児などによる職業の中断は、その後、正規での就業に就くことを困難にしており、子育て後の女性の就労は、多くが非正規の形態である。さまざまな対策が講じられつつあるものの、このような状況は、働く以前の状態にある女子高校生の考え方にも影響を及ぼしていると考えられる。また、多項ロジットモデルによる推定から、男子では、成績自己評価、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、女子では、学校ランク、予定進路、進路に関する意識、フリーターに関する意識、親との同居に関する意識が、有意な効果をもっていた。

進路・フリーター・親との同居に関する意識との関連で、分析の結果明らかになったことをまとめておこう。

第一に、進路に関する意識は、キャリア/ライフデザインと密接な関連をもっていることが明らかになった。どのような仕事をしたいかわからなかったり、進路について悩んでいた、その一方で、現在志向で進路決定に忌避的だったりといったような場合、〔未定〕になりやすい傾向が見いだされた。また、〔自営〕を希望する者は、非常に明確な目標意識をもっていた。組織に縛られずに仕事をしていくには、それ相応の覚悟が必要であり、高校生の時点でそれを志向するということは、それなりに目標が明確でなければそのような希望をもつことはないといえるだろう。これらの結果は、現在の進路に関する意識が、キャリア/ライフデザインのさまざまな側面の意識を示していると考えられ、当然のことといえるのかもしれない。

第二に、フリーターに関する意識は、フリーターの現状を認識していても、それがキャリア/

ライフデザインを描く上で、重要な役割を果たしているというほどのものではなかった。「誰でもフリーターになるかもしれない」と思いながらも、実際にフリーターを経験したわけではない（予定進路がフリーターの者も含まれてはいるが）。実際にフリーターになった者とそうではない者とで、フリーターに関する意識に違いが見られるか、またその意識とキャリア/ライフデザインは関連があるのかについては、非常に興味深いところである。

第三に、親との同居に関する意識は、女子のみ、キャリア/ライフデザインとの関連が見られたことである。全般的に見ると、男子よりも女子のほうが同居に対して、肯定的な意見が見られた。しかし、その女子の中においても違いが見られ、〔未定〕の者では、親への依存度が高い傾向が見られた。親子関係も、子どもの自立には重要な要因となっていることが示唆される³⁾。

本稿で用いたデータは、パネル調査の初年度のものであり高校生を対象としている。まだ、社会に出ていない高校生にとり、職業に関する情報は、アルバイト経験や親をとおしてのものなど、非常に限られている。高校卒業後、これまでよりも世界が広がり、さまざま経験をし、職業に関する情報も増えていくだろう。それにより、キャリア/ライフデザインも変化する可能性は十分にある。追跡調査のデータを用いることにより、本人をめぐる状況の変化（就職したのか、進学したのか、また、進学した先の種類など）や意識の変化についても知ることが出来る。これらのさまざまな変化が、キャリア/ライフデザインを変化させるのか、させないのか、また、変化が見られるとしたら、どのような要因が影響を与えているのかなど、非常に興味のあるテーマであり、今後の検討課題としたい。

[注]

- 1) 「正社員として働きたい」を〔正社員〕、「自分で事業を起こしたい」、「親の家業をつぎたい」、「独立して一人で仕事をしたい」を〔自営〕、「わからない」を〔未定〕、その他の回答は〔アルバイト・パート他〕に分類した。女子の場合は、これらに加え、「専業主婦」を〔専業主婦〕とした。
- 2) 性別と各意識の関連を見ると、「生活費がうくので、好きなことに使えるお金が増えて得だ」以外の項目で、有意な差 ($p<0.01$) が見られる。
- 3) 本稿で用いたデータには、親子関係に関する変数（データ）も含まれているが、今回は分析に用いていない。

[参考文献]

- Alexander, Karl M., Eckland, Bruce K., & Griffin, Larry J. 1975. "The Wisconsin Model of Socioeconomic Achievement: A Replication", *American Journal of Sociology* 81-2: 324-342.
- Burke, Peter J. & Hoelter, Jon H. 1988. "Identity and Sex-race Differences in Educational and Occupational Aspiration Formation", *Social Science Research* 17: 29-47.
- 林拓也. 2001. 「地位達成アスピレーションに関する一考察—先行研究の検討とキャリアアスピレーション研究の展望」『東京都立大学人文学報』第318号: 45-70.
- 林拓也. 2002. 「キャリアアスピレーションの規定要因—キャリア形成期にある男性雇用者を対象として—」『東京都立大学人文学報』328号: 39-60.
- 岩木秀夫・耳塚寛明. 1983. 「高校生—学校格差の中で—」『現代のエスプリ 高校生』至文堂 No.195:

- 岩永雅也. 1990. 「アスピレーションとその実現—母が娘に伝えるもの—」岡本英雄・直井道子（編）『現代日本の階層構造4 女性と社会階層』東京大学出版会 91-118.
- 荻谷剛彦. 1986. 「閉ざされた将来像—教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究』第41集: 95-109.
- . 1995. 『大衆教育社会のゆくえ』中公新書.
- 片瀬一男. 1990. 「職業アスピレーションの形成—専門職志向を中心に—」海野道郎・片瀬一男（編）『教育と社会に対する高校生の意識：第2次調査報告書』東北大学教育文化研究会 57-72.
- . 2003. 「夢の行方—職業アスピレーションの変容—」『人間情報学研究』第8巻: 15-30.
- 神林博史. 2000. 「性別役割意識はアスピレーションに影響するか？—高校生女子のアスピレーションの規定因に関する計量的研究—」『理論と方法』Vol.15 No.2: 359-374.
- 木村邦博・元治恵子. 2001. 「高校生の進路希望：教育アスピレーションと職業アスピレーション」片瀬一男（編）『教育と社会に対する高校生の意識：第4次調査報告書』東北大学教育文化研究会 11-26.
- 小杉礼子. 2001. 「変わる若者労働市場」矢島正見・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界—トランジッションの社会学—』23-38.
- 耳塚寛明. 1988. 「職業アスピレーション—教育選抜とアスピレーション・クライシス」『青年心理』72: 30-36.
- 中山慶子・小島秀夫. 1979. 「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一（編）『日本の階層構造』東京大学出版会 293-328.
- 尾嶋史章. 2001. 「進路選択はどのように変わったのか—16年間にみる進路選択意識の変化—」尾嶋史章（編著）『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 21-61.
- 佐藤嘉倫. 2007. 2005SSM研究会産業・職業班第3回研究会配布資料.
- Sewell, William. H., Haller, Archibald O., and Portes, Alejandro. 1969. "The Educational and Early Occupational Attainment Process", *American Sociological Review* 34(1): 82-92.
- Sewell, William. H., Haller, Archibald O., and Ohlendorf, George W. 1970. "The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and Revision", *American Sociological Review* 35(6): 1014-1027.
- 新谷康浩. 1996. 「職業アスピレーションの変化—「専門職」志向を中心に—」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男（編）『教育と社会に対する高校生の意識：第3次調査報告書』東北大学教育文化研究会 109-120.
- 竹内洋. 1995. 『日本のメリトクラシー—構造と心性—』東京大学出版会.

価値観の再生産に関する日米比較研究

——母親の子育て観と高校生の価値観——

深堀聰子

(京都女子大学短期大学部)

メリトクラシーの枠組みだけでは説明することのできない日本の高校生の多様な価値観がどのように形成されているのかを、アメリカの高校生を合わせ鏡としながら、母子間における価値観の再生産の実態に注目することで明らかにすることが、本稿の課題である。まず日本の高校生の価値観の特徴として、地位達成志向が相対的に希薄であり、家庭生活志向・自己充足志向・共生志向が顕著であることがわかった。つぎに日本の母親の子育て観の特徴として、社会性志向は普遍的に共有されているが、地位達成志向は希薄であり、高階層を中心とする比較的幅広いグループによって支持されていることがわかった。そして地位達成志向の価値観は、会話を通して母から子へと伝達されることで再生産されている。他方、日本社会で広く共有されている社会性（共生）志向は、母親を経由せずに高校生によって内面化されている。

1. はじめに

1.1 問題の設定

人は生活のなかで何を優先し、何のために心を砕き、努力するのだろうか。「仕事で成功すること」「よい教育を受けること」「結婚して幸せな家庭生活をおくること」「子どもをもつこと」「好きなことを楽しむ時間をもつこと」「親友をもつこと」「人の役に立つこと」などの生き方の選択肢のなかで、いずれに重点をおくかによって人の行動のパターン、選択、ライフスタイルは異なってくる。私たちは他者との価値観の相違に日々遭遇し、面白いと感じたり、戸惑ったり、憤ったりしている。

このように価値観の多様性は、ごく身近な現象であるにもかかわらず、教育達成の研究では十分に取り上げられてこなかった。保護者が学校に何を求め、児童生徒がなぜ学校に通っているのかは一様でないにもかかわらず、主に高校生を対象としてきた日本の教育達成の研究では、彼らの学習行動や進路選択は、あくまでもメリトクラシーの枠組みのなかで解釈されてきた。そのなかで高校生は、学校や仕事での成功を重視し、地位達成のために努力を惜しまないグループと、学校での地位の低さに対する欲求不満を、逸脱文化を形成することによって克服しようとするグループに大別されてきた（耳塚、2000年）。近年では、高校生の地位達成志向の希薄化と階層分化（荻谷、2000年）、学校へのコミットメントの低下と逸脱文化の遍在化（大多和、2000年）、脱学校感の蔓延と学校外の世界への関心の高まり（轟、2001年）の実態が明らかにされてきているものの、メリトクラシーとは異なる原理にもとづいて高校生の行動や選択を解釈する試みは、未だほとんど手がけられていない。

この若年パネル調査研究の一環として、深堀（2005年、2006年a、2006年b）が実施してきた日米の若者と保護者の価値観の分析は、日本の若者の価値観の多様性をとらえようとする試みであった。分析からは、日本の高校生の地位達成志向（「仕事で成功すること」「仕事で尊敬されること」「お金も持ちになること」を重視する傾向）が①アメリカの高校生と比較して著し

く低く、②高卒後1年目にはさらに低下すること、そして③保護者の地位達成志向はいつそう低いことが明らかになった(付表1参照)。グループ別にみると、たとえば「仕事で成功すること」を重視する傾向は、高校3年時には進学率の低い「専門学科」や「普通科進路多様校」の「男子」の間で最も強く、「専門学科」や「普通科進路多様校」の「女性」の間で最も弱い。そして高卒1年目には、「就職者」と「女性」の落ち込みが顕著になっている。これらの結果は、性役割分業意識を強くもった高卒就職者が、「大卒男子」を優遇する日本の職業社会のなかで、地位達成志向を著しく減退させていく過程をスナップショットのように捉えている。

地位達成志向に対抗する価値観として、日本の若者によって重視されているのは、①自己充足志向(「親友」と「好きなことを楽しむ時間」をもつことを重視する傾向)、②家庭生活志向(「結婚して幸せな家庭生活」や「子ども」をもつことを重視する傾向)、および③共生志向(「人の役に立つこと」などを重視する傾向)の価値観であった。親友や家庭を重視する傾向はアメリカの若者の間でも顕著であるが、人の役に立つことを重視する傾向は、日本に特徴的である。そしてその傾向は、「女性」の間でとくに強く、学科による有意な差異はみられない。

以上の結果は、日本の若者が地位達成志向以外にも、自己充足志向、家庭生活志向、共生志向の価値観をあわせもっており、所属する学科や進路、性別によって重視する事からの比重が異なることを示している。本稿ではこれらの結果を踏まえて、メリトクラシーの枠組みだけでは説明することのできない日本の高校生の多様な価値観がどのように形成されるのかを、アメリカの高校生を合わせ鏡としながら、とくに価値観の世代間の移転、母子間における再生産の実態に注目することで明らかにすることをめざす。

なお従来、子どもの価値形成の要因として、親から意図的・無意図的に伝達される意味世界としての「ハビトゥス」や「文化資本」と並んで、子どもが所属する社会集団に支配的な意味世界としての「学校文化」「若者(生徒)文化」「ジェンダー規範」などの重要性が指摘されてきた(長尾・池田、1990年)。本稿は、子どもがその価値形成において学校や仲間などの社会文化的要因から受ける影響をコントロールしながら、親をはじめとする家庭的要因から受ける影響の強さを探る試みといえる。

以上の問題関心より、次の3つの問いに対する答えを導くことが、本稿の課題である。

第一に、日米の母親はいかなる子育て観を有しており、それは異なる家庭的・社会文化的状況のもとで、どのように異なるのだろうか。

「NHK 中学生・高校生の生活と意識調査(以下、NHK 調査)」(NHK 放送文化研究所、2003年)によると、日本の母親の大多数が、今の世の中は学歴社会だ(「そう思う」と回答した比率: 74.0%)と考えながらも、自己主張よりも協調(「自己の考えに近い」と回答した比率: 66.7%、以下同様)、競争よりも人生を楽しむこと(73.4%)などを望ましい生き方とみなしており、子どもの自由を尊重し(79.2%)、子どもにとって友達のような親(82.8%)でありたいと考えている。それに対して高校生も、自分の母親はやさしくてあたたかい(「そう思う」と回答した比率: 81.2%、以下同様)と感じているものが多数派で、きびしく(31.9%)、勉強や成績についてうるさく言う(39.5%)と感じているものは少数派である。

これらの結果から連想される、いわばリラックスした子ども本意の母親のイメージは、高度経済成長期以降に大衆化した「教育する家族」や「パーフェクト・マザー/チャイルド」などに象徴される、教育熱心な母親のイメージ(広田、1999年)とは大きくかけ離れたものである。本田(2004年)は同様の問題意識から、「子どもの成績について、親として特に手を打つよう

なことはしていない」と回答する「非教育ママ」が小中学生の母親の6割を占めており、とくに母親のもつ時間的・文化的資源が少ない層（低学歴非専業主婦層）に多く出現することを示し、「日本の母親たちは基本的にはほぼすべて『教育ママ』化している」という「総教育ママ化」説は誤りであると指摘している。

したがって、子どもの学校や仕事での成功を重視するメリトクラティックな子育て観を自覚的に有しているのは、高階層を中心とする一部の母親であり、低階層を中心とする大多数の母親は、むしろ他者と協調しながら生活を楽しむことを重視する子育て観を有していると考えることができる。

第二に、母親の子育て観は高校生の価値観に、どのような影響をおよぼしているのだろうか。いわゆる文化的再生産論は、親の有形・無形の文化的所産が子どもに伝達される「メカニズム」を探る試みであったといえるが、そもそも価値観という身体化された文化資本が、母子間でどの程度再生産されるのかを、メリトクラシーの枠組みを超えて、実証的に明らかにした研究は稀少である。

たとえば卯月（2004年）による、子どもの「学校外学習時間」と「大学進学アスピレーション」に対する親の「教育意識（子どもが大学に進学することについての希望の有無）」と「教育的態度（「子どもがよい成績をとるように手立てをこうじている」か否か）」の影響に注目する研究は、母親のメリトクラティックな意識や態度が、階層（父母学歴）とは独立して、子どものメリトクラティックな行動や意識を高める有意な効果をもつことを明らかにしたものである。すなわちそれは、メリトクラシーの枠組みのなかで、母子間における地位達成志向という価値観の再生産の実態を捉えた実証的研究といえる。

他方、先に引いた本田（2004年）による「教育ママ」の研究は、母親が「教育ママ」として子どもの学校での成功を重視することが、メリトクラシーの枠組みでは捉えることのできない子どもの「やりがい志向」に有意なプラスの効果をもつことを示している点で、本研究にとってとくに示唆に富む。「やりがい志向」とは、将来の生き方に関する6つの項目について、子どもにそうしたいかとたずねた結果（1～5）に対して行った主成分分析（バリマックス回転）より抽出された2つの主成分の1つである。すなわち「社会や人のために役立つことをしたい」「仕事ひとすじにうちこみたい」「新しいことや難しいことに挑戦したい」「毎日をのんびりと平和にいきたい」「お金持ちになって豊かな生活をおくりたい」「高い地位につきたい」の6項目に対して、最初の4項目と強い相関をもつ主成分が「やりがい志向」であり、最後の2項目と強い相関をもつ主成分が「地位達成志向」である。そして興味深いことに、母親が「教育ママ」であることは、子どもの「地位達成志向」には有意な影響力をもたない。これらの結果は、母親の学校での地位達成を重視するメリトクラティックな態度が、子どもの社会での成功をめざすメリトクラティックな意識に直結するのではなく、むしろ日々の人生に能動的にかかわる姿勢を促す働きをもつことを示している。

このように親子間における価値観の再生産は、文化的再生産論において自明視されてきたものの、親の子育て観が子どもの価値形成に具体的にいかなる影響をおよぼしているのかについては、未だきわめて断片的な理解しかえられていない。

第三に、コミュニケーションの言語化されたモードとしての「会話」は、日米の母子間ではいかなる頻度で展開されているのだろうか。またそれは、異なる家庭的・社会文化的状況のもとで、どのように異なるのだろうか。さらに母子間の価値観の再生産のあり方は、会話頻度に

よってどのように異なるのだろうか。

「ハビトゥス」や「文化資本」が人の生まれ育つ環境のもつ有形・無形の文化的所産の影響を受けて形成されている以上、価値観も暗黙のうちに親から子へと伝達されている部分が少なくないだろう。しかしその一方で、会話を通して言葉で説明しなければ伝わらない信念や人生哲学も多いはずである。

いわゆるコード理論によると、人間のコミュニケーションは、個別のコンテクストに埋め込まれた特殊な意味体系を前提とした「制限コード」と、コンテクストから独立した普遍的な意味体系を前提とする「精密コード」から成り立っている。そしてイギリスの労働者階級の家庭では、構成員の家庭内での役割や地位が年齢や性別によって固定化されているため、家庭内の会話は主として互いの「地位」を再確認するために、制限コードを用いて展開されている。それに対して中産階級の家庭では、構成員の家庭内での役割や地位はその個性によって規定されるため、家庭内の会話は主として互いの「個性」を明確化するために、精密コードを用いて展開されている。この理論に従うならば、会話の必然性は、暗黙の了解のなかで家族生活が営まれている低階層の家庭よりも、個性の表出を不断にもとめる高階層の家庭で高くなると考えられる。さらに母子間の価値観の再生産は、特殊なコンテクストに依存する制限コードによる会話が少ない頻度で展開されている低階層の家庭よりも、より普遍的に適用される精密コードによる会話がより頻度で展開されている高階層の家庭において、より円滑に遂行されると考えられる。

もっとも前述した NHK 調査によると、日本の高校生は、悩み事の相談相手として「母親」(17.1%)よりも「友達」(66.8%)をあげる比率が圧倒的に高かったものの、大多数が母親と「いろいろなことを話」し(80.1%)、「家にいると楽しいことが多い」(66.6%)と感じている(NHK 放送文化研究所、2003 年)。この結果より、会話に用いられている言語コードの種類を判別することはできないが、日本の母子間の会話は、全体としてきわめて高い頻度で展開されていることがわかる。

1.2 分析のアプローチ

以上の3つの課題に取り込むにあたって、本稿では実証研究データにもとづく日米比較のアプローチを用いる。現代日本の若年層の価値観の特徴を明らかにするためのアプローチとしては、他国の若年層との比較の他に、①同時代の中老年層との(ライフステージ別の)比較や(加藤 2003 年、NHK 放送文化研究所 2004 年)、②他の時代の若年層との比較(樋田ほか 2000 年、尾嶋 2001 年、NHK 放送文化研究所 2003 年)などが考えられる。いうまでもなく、中老年層と比較することで、その時代の若年層の特徴を捉えることには限界がある。なぜなら価値観は、生活経験の幅や背負っている社会的責任の重さなどの影響を受けて、年齢とともに変化するからである。いつの時代にも、中老年層の視点から若年層の未熟さが否定され、若者バッシングが繰り返されてきた。

他方、異なる時点の若年層の比較は、年齢の影響をコントロールするうえでは有効であるが、日本という固有の社会文化システムのなかで暮らす若年層の特徴を捉えるうえでは限界がある。価値観が家庭的・社会文化的要因の影響を受ける以上、家族関係、性役割分業、学校ヒエラルキー、学校と職業社会との接続、階層などの社会文化システムが異なる他国の若年層と比較することなく、日本の若年層の価値観の特徴を論ずることはできないからである。

これらの理由から、異なる社会文化システムのなかで暮らす若年層の特徴を捉える国際比較のアプローチは、若年層の価値観についての理解を深めるうえでより有効といえよう。既存の実証データにもとづく若年層の価値観の国際比較研究としては、アメリカ連邦教育省国立教育統計センター(以下、NCES)が1980年に実施した High School and Beyond (HS&B)調査と日本青少年研究所が1980年に実施した「高校生将来調査」(日本青少年研究所、1984年)の比較研究(天野ほか1987年、千石・デビッツ1992年)が代表的なものである。その後、明確なサンプリングにもとづく大規模な若年層の日米比較調査は、この若年パネル調査をのぞいて未だ実施されていない(日本青少年研究所、2005年)。

なお、同じ時代に他国で暮らす若年層を比較することが必ずしも妥当とはいえない場合もある。社会文化システムの中長期的・構造的影響を、その時代特有の景気や世相などの短期的・表層的影響から区別して比較するためには、類似した短期的・表層的影響下にある時代の若年層を比較することが望ましいからである。たとえば図1に示す失業率の推移に象徴されるように、1980年代に未曾有の不景気に陥り始めていたアメリカと、経済的飛躍を遂げ始めていた日本とでは、高校生は彼らを取り巻く社会から大きく異なる影響を受けていたはずである(図1参照)。

このような観点から本稿では、政治・経済的情勢において類似した時代の日米に注目することで、両国固有の社会文化システムの中長期的・構造的影響のもとでの価値観の実態と再生産のあり様を明らかにすることをめざす。

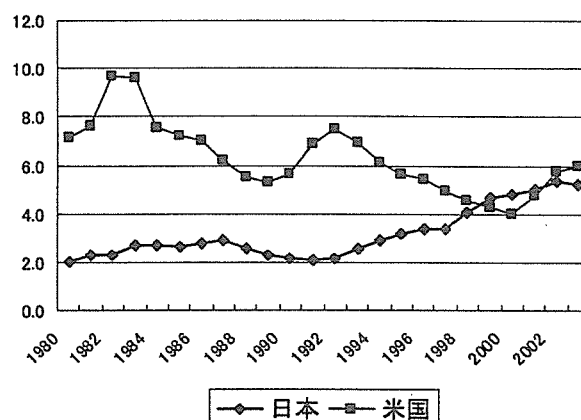


図1. 日米の失業率の推移(1980 - 2003年)

注) OECD (2005) “Evolution of unemployment rates since 1980:

Persons unemployed as a percentage of the labour force”より作成。

2. データと変数

2.1 分析するデータ

この若年パネル調査では、日米比較が可能となるように、調査票作成段階に NCES による全米規模の中等学校生徒パネル調査 National Education Longitudinal Study (NELS)と共通質問を設定した(NCES, 2002)。1992年に第12学年生徒を対象に実施された NELS コーホートを、2004年に高校3年生を対象に実施した若年パネル・コーホートの比較対象としたのは、両コーホートが労働市場と教育の環境において、非常に類似した状況におかれていたためである。長期的

な不況に見舞われていた 1990 年代初頭のアメリカでは、景気回復が切望されていた。その一方で、中等後教育機関への進学率は上昇し続け、多くの高校生にとって就職よりもむしろ進学が高卒後の進路の有力な選択肢となっていた。さらに、教育水準の低さが国際競争力低下の主要因であると論ぜられ、学力向上に向けた教育改革が本格的に手がけられていた。これらの状況は、いずれも 2000 年代初頭の日本と非常に類似している（図 1 参照）。したがって両コーホートを比較することによって、就職・進学機会の開放性や学力形成に対する社会的圧力という観点から、政治・経済的情勢において類似した時代における親子の価値観の実態と再生産のあり様を明らかにすることができる。

本分析で使用するのは、日本の高校 3 年生 7,563 人を対象とした若年パネル高校生調査（2004 年 1～3 月実施）、および日本の高卒者（1 年目）と保護者 485 人を対象とした若年パネル第一次追跡調査（2004 年 10 月～2005 年 2 月実施）のデータに含まれる、高校 3 年生と母親のペア 368 組のデータである。比較対照するのは、アメリカの第 12 学年生徒 15,964 人とその保護者を対象とした NELS 第 2 次追跡調査（1992 年実施）のうち、第 4 次追跡調査（2000 年）の対象にもなった生徒（12,144 人）と保護者のデータに含まれる、第 12 学年生徒と母親のペア 8,206 組のデータである⁽¹⁾。

本分析において父親ではなく母親と高校生の関係に注目するのは、日本型雇用慣行のもとで父親が市場労働を、母親が家事・育児をおもだって分担する性役割分業の態勢をとっている家庭が日本では依然として一般的であり、家庭内での父母役割に構造的な違いがあると予想されるからである。分析対象を母子ペアに限定することで、そうした構造的な違いをコントロールすることができるが、市場労働におもだって携わっている父親が子育てにはたす役割を見過す結果を招く点に、本分析の限界が指摘される。

2.2 分析に使用する変数

分析に用いる変数を、次のとおり定義する。

まず、高校生の価値観や母親の子育て観を規定する家庭的要因として、「所得」と「母学歴」に注目する。所得と親の学歴は、「文化資本」の質と量を規定する「階層」の主要な指標として、多くの先行研究で採用されてきた。所得は「高所得層（日本：1000 万円以上、米国：7 万 5 千ドル以上）」「中所得層（高）（日本：1000 万円未満、米国：7 万 5 千ドル未満）」「中所得層（低）（日本：700 万円未満、米国：3 万 5 千ドル未満）」「低所得層（日本：500 万円未満、米国：2 万ドル未満）」の 4 カテゴリーから構成され、母学歴は「高学歴（日本：大卒以上、米国：4 年制大学卒業以上）」「中学歴（日本：専門学校・短大卒、米国：2 年制大学卒業）」「低学歴（日本：中・高卒、米国：2 年制大学卒業未満）」の 3 カテゴリーから構成される（表 1 参照）。

つぎに、高校生の価値観を規定する社会文化的要因として、「学科タイプ」と「性別」に注目する。学科タイプが高校卒業後の進路を決定する要因として大きなウェイトをしめていることは、先行研究で繰り返し示されてきた（樋田ほか 2000 年、尾嶋 2001 年）。したがって学科タイプは、進路決定の背後にある価値観の形成にも一定の影響をもたずであり、同じ学科に在籍する高校生が共有する生活や意識に対する「学校文化」の指標とみなすこともできる。学科タイプは、高校卒業後に予定される進路によって、「進学系（日本：普通科進学校、米国：進学課程）」「進路多様系（日本：普通科進路多様校、米国：一般課程）」「就職系（日本：専門学科、米国：職業課程）」の 3 カテゴリーに分類される。性別は、高校生が女性や男性であることによ

って社会の「ジェンダー規範」や仲間集団の「生徒文化」からうけている影響をとらえる二値変数である（表 1 参照）。

表 1.日米の母子の価値観に影響をおよぼす家庭的・社会文化的要因（％）					
		日本		米国	
所得	高所得層	1000 万円以上	22.9	7 万 5 千ドル以上	10.7
	中所得層（高）	1000 万円未満	28.9	7 万 5 千ドル未満	38.9
	中所得層（低）	700 万円未満	19.6	3 万 5 千ドル未満	24.2
	低所得層	500 万円未満	28.6	2 万ドル未満	26.3
学歴	高学歴層	大卒以上	15.1	4 年制大学以上	16.8
	中学歴層	専門学校・短大卒以上	39.5	2 年制大学以上	34.4
	低学歴層	中・高卒以下	45.4	高卒以下	48.8
学科	進学系	普通科進学校	55.4	進学課程	41.8
	進路多様系	普通科進路多様校	31.3	一般課程	45.8
	就職系	専門学科	13.3	職業課程	12.4
性別	男性	男子	40.5	男子	50.0
	女性	女子	59.5	女子	50.0

高校生の価値観の指標としては、先の研究（深堀、2005 年）で注目した 13 の価値項目のうち、日本の高校生（n=7,563）の半数以上が「とても重要」と回答した「親友をもつこと（85.0％）以下、親友」「好きなことを楽しむ時間をもつこと（78.4％）以下、趣味」「人の役に立つこと（68.5％）以下、人の役に立つ」「結婚して幸せな家庭生活をおくること（66.4％）以下、結婚」「仕事で成功すること（53.3％）以下、仕事で成功」「子どもをもつこと（50.0％）以下、子ども」の 6 項目と、従来のメリトクラシーの枠組みで注目されてきた「よい教育を受けること（31.5％）以下、教育」の項目を含む 7 つの価値項目に注目する（「とても重要：2」「少し重要：1」「重要ではない：0」と得点化）。なおこれら 7 つの価値項目は、13 の価値項目に対して実施した因子分析の手法（主成分分析法・バリマックス回転・因子数は最小）より導かれた 4 つの価値因子 との相関関係の強さにもとづいて分類し、①「仕事」と「教育」⁽²⁾を重視するのは地位達成志向の価値観、②「結婚」と「子ども」を重視するのは家庭重視の価値観、③「趣味」と「親友」を重視するのは自己充足志向の価値観、④「役立つ」を重視するのは共生型の価値観とみなすことにした（表 2 および付表 2 参照）。